

猛禽界：神話の世界から科学の領域へ

NPO 法人 ラプタージャパン（日本猛禽類研究機構）理事長
阿部 學

1. 名ばかり「猛禽アセス」

これまで20年もの間、猛禽類アセスは体を成していないと主張し、あるべき姿を提言し続けてきたが、今日に至るも微塵の改善も見られないことから、余命幾ばくもない時間の無駄を悟りシンポ、講演、研修、投稿活動の一切を停止した。今回図らずもこの分野に影響のある当誌からの依頼を受けて最後のご奉公と思ってお引き受けした。喝采を浴びないまでも各方面に当たり障りのないことを書けば思いもめでたいところであるが、それでは与えられた使命を果たせないの、敢えて実態を伝えることにした。

猛禽アセスが機能していないと言っても異分野の読者は理解し難いので、関係者には「耳タコ」の実態を紹介したい。事業現場に「種の保存法」対象猛禽類が生息していると、1) 事業者は法遵守、絶滅危惧種保全の立場から専門家を招集して委員会を立ち上げ、事業と猛禽類の共存策を諮問する。2) 専門家は事業が猛禽類に与える影響を予測・評価し、必要に応じて保全策を提言する。3) コンサルは事業者と協議し委員会の決定を受けて現地調査などを実施する、という役割分担が成立している。

専門家の承認を得て行われた調査の結果、委員会に提供されるデータは双眼鏡で眺めた飛翔の軌跡と巣の位置のみである。委員は地図に描かれた幾筋もの曲線を肴にああでもない、こうでもない小田原評定を繰り返した挙げ句、想像で事業の影響の有無を評価し、影響ありと感じれば保全策を提言する仕儀となる。実際問題としてミミズが這ったような線をいくら眺めても事業の影響が評価できないことは自明の理であるにもかかわらず、専門家は与えられた役割を演じるためにまことしやかに影響の有無を論じ、保全策を提言する。たとえば、非繁殖期の工事、低騒音型／低振動型重機の使用、作業員の隠蔽、重機類の塗色変更、巣の直近は迂回またはトンネル、トンネルには防音扉、馴化、果ては作業員の教育までである。冷静に考えると、これらの保全策は調査結果とは何ら脈絡がないことに気づく。即ち、委員が頭の中でよかれと思いついた事柄を羅列したに過ぎない。しからば莫大な血税と時間を費やした調査も

委員会も不要で、「保全策のはんこ」を作っておけば最大の費用対効果を発揮するというものである。猛禽類も莫大な血税を食うとの誹りを免れる。

何よりも問題なのは、保全策は事業との共存を図る策でなければならないが、これらのいずれも目立たず、隠れて粛々と事業を進める奸計で、猛禽類が繁殖期を迎えて営巣地に戻ると営巣木は伐倒され、餌場は破壊され、子育ての場は消失し、もはや生存できない環境と化している。生きものは環境によって生かされているが、その生息環境を保全する策は皆無である。これが絶滅危惧猛禽類の保護を標榜する専門家の保全策である。

2. 科学的・客観的評価法

事業の影響を評価する最も正統的な手法として、フロリダ半島に飛行場を建設する際に採用された事例がある。建設予定地周辺に生息する絶滅危惧種のカタツムリトビ30数つがいの繁殖成績と対照区における同数のそれとの比較が行われた。即ち、産卵数、抱卵時間、孵化率、巣立ち率、給餌量、雛の成長などを調査して比較した。実験区ではノースウエスト航空会社が旅客機を提供して離着陸を模した飛行を繰り返した。その結果、両地域の繁殖成績に有意差がなかったことから、飛行場建設は影響がないと断じた。影響評価法は科学的、客観的、定量的でなければならない。

筆者はアセスなる文言のない時代に育ったので、この分野はズブの素人であるが、猛禽類の生態を研究してきたためか各地の委員会に招聘されてきた。そこでアセス委員会の実態を垣間見て驚きを禁じ得なかった。何ら科学的データなしに双眼鏡で眺めた知識をもとに述べられたことがいつの間にか定説となっていく事実。影響の評価は想像、保全策は思いつき、まさに猛禽界は今なお神話の世界である。筆者はこれまでにイヌワシ、クマタカ、オオタカ、ハヤブサ、サシバ、ハチクマ、ミサゴ、フクロウ、ノスリなど250余個体にGPS発信器を装着して人工衛星で追跡しているが、巷の定説（行動圏、行動生態：移動、分散、渡り、縄張り等）は実態とは似て非なるものである。

という自分も論評ばかりでは同じ穴の貉となるので、試行錯誤を繰り返して現在は以下の提言を行っている。ただ、これが唯一の手法とは考えていないがズブの素人の浅知恵としてご笑覧いただきたい。発信器の寿命は10年近くもあるので、事業前・中・供用後の永きにわたる位置情報が得られることから、対象個体が事業をどのように認識しているのか、即ち事業現場とGPSの位置関係から事業を忌避しているのか無頓着なのかを客観的に知ることができるほか、重機の種類や車両台数、工種、作業員の稼働実績、騒音・振動など対比することによって事業の影響評価が可能となる。これらのデータは将来、類似の事業現場においてどの時期に、どの距離で、どの工事を回避すべきかの指針を得ることができる。また、位置情報が集中する箇所は彼らにとって意味のある場所（たとえば営巣の場、採餌場、子育ての場、見張り場など）と認識することができるので、その箇所を工事ヤード、工事用道路、原石山、土捨場などとして破壊しない配慮を行うことによって保全策と位置づけることができる。

3. コンサルの果たすべき役割

絶滅危惧種の保全という国民と事業者の付託を受けた専門家はその職責を果たすために科学的データ収集のための調査手法を提言する立場にあるにもかかわらず、20年もの間、何らの提言もせず血税と時間を浪費してきた責任は重い。現行の委員会は単に事業者にお墨付きを与える場と化している。専門家は現行のバードウォッチングを指示した以上、得られた飛跡をどのように解析し、評価するのかのフローを示すべきである。これが無理なら評価、保全策の策定を可能ならしめる調査法を提言する責務を自覚すべきである。

片やコンサルは現場に精通していることから机上の空論を展開する専門家に比ぶべくもないプロであるから、専門家の方々が展開する茶番劇を歯がゆい思いで嘲笑しているに違いない。本来、コンサルとは名の通り事業者に有益な助言をする立場にある。しかし、業務を受注する立場では理屈通りにいかないことは理解できる。そこで協会としての立場で提言をまとめて事業者に進言すれば、事業者の意図にも合致する上に何より血税の有効利用にも資すること

になる。

さて、欧米では、風力発電のブレードが猛禽類やコウモリなどを衝突死に至らしめることが問題となって久しい。わが国でも昨今その波を受けて現場ではまたもや目視観察が横行しているが、夜行性の渡り鳥やコウモリには対処できない上に、人海作戦にしても月に2～3日が限界で実態把握や経費の面でも無理がある。

ソーラー搭載のGPS発信器は電源の枯渇がなく、緯度・経度、高度、速度、方位などのデータを365日、24時間にわたり提供するので、予め立地周辺に生息する猛禽類に装着して飛翔ルート、飛翔高度を調べておけばブレードの高さ規制や主要な移動ルートを避けて立地させることが可能となる。

専門家の方々がこの記事を目にして、ド素人にかかることを言わせてなるものかと発奮していただけたら望外の喜びである。



クマタカとともに

Profile

阿部 學氏 Manabu ABE

NPO 法人 ラプタージャパン（日本猛禽類研究機構）
理事長

■執筆略歴

北海道大学大学院 農研科博士課程 修了
北海道工業大学 講師
農林省林業試験場:農水省森林総研研究科長
科技厅長期在外研究員:ミシガン大学資源計画と自然保護学科
客員教授
新潟大学大学院教授